



空の証

ku-noakashii

parikasa

真っ暗な夜道をひとりで歩いていた。誰と会うわけでも、どこに向かうわけでもないのに。ただひたすら。

それがFと会う前に感じていた朋子の今まで生きてきた感覚だった。

歩いているのが夜道で当たり前だと思い込んでいるから、暗くても別に気にはならなかった。Fと出会ったことで、歩いているのが夜道じゃなくてもよかったんだと気が付いてからはもうFの虜になってしまっていたんだ。

Fは朋子のその感覚を明るく照らしだしてくれた。人生観とか、方法論とかいろんなことを。

「知らない？ この前の修学旅行に来ていた人よ。 みんな覚えてないの？」

そんなことはなかったと、その場に居合わせたクラスメートの一致した意見だった。誰も知らないわけがない。みんなの一致した意見は当然、「知ってる、あの人でしょ？」だと思っていたのに。

誰も彼のことを知らないと言っている。朋子はFの存在を肯定できる写真とかメールアドレスとかを何一つ持っていなかった。ひとりでFのことを懸命に訴えても、なぜかありえないことを訴えていて、まるで変人扱いのような嫌気の差した目でみんな自分を眺める。そんな顔で私を見ないで。めそめそとひとりで泣いた。

挙句、クラスの誰かが朋子の異変をタンニンに訴えて、それを聞いただけで家までやってきた。

こんなことは学校では言いにくいから、詰まる処、病院に行った方がいいとタンニンは迫った。そのくらいのことは電話で言えよ、いつもながら大して役に立たない奴だと思った。朋子は君たちを認めたくない。Fの存在を認めてくれないのと同じレベルで。

涙を流すのは簡単なのに、その事実を受け入れられる訳ではなかった。

Fと再会を約束した公園には何度も行ったりした。Fは必ず現れるはず。そう思って、何度も足を運んでは会えなくて、帰り道また泣いた。また朋子は夜道を歩くことになった。

それでも同じ地球に住んでいるのは確かなんだから、いつか必ず会えると信じて、生きている。今でも本気でそう思って生きているんだ。

切望も熱望も今はないけれど、Fとの再会をただ待っている。日常の生活を何気なく過ごしながら。それが絶望に変わらないように、ただ願うだけがそれから十年間の朋子だった。

佐々山クリニックに通うようになって、すぐに十年経った。今日はさわやかな晴れ間が差している。いつも土曜日の午前中に月に二回通っている。今の朋子に特別な悩みや、ひどい憂鬱などはない。単に薬をもらいに行くついでに世間話をする程度だ。このクリニックは心療内科クリニックだ。

白衣を着るでもなく、偉そうにするでもなく、朋子の喋ることを手書きのカルテにゴリゴリと熱心に書き込んで感想を述べる。それが有り難いのかお節介なのか無関心なのか..... よくわからないけれど、まあそれはそれでいいかと思いながら、「またおいで」とにこやかに送り出される。

朋子の話に笑ったり、怒ったり、忠告したり、代わりに考え込んだり..... 他の病院に行ったことはないけれど、他の病院に行きたいとか、行きたくないとかそういうことではないが、たぶん、月に二回の病院通いが心地よいから、十年も通っているのだろうと朋子は思っている。

このクリニックは街中のオフィスビルの四階にあり、患者はものすごく多い時と少ない時とがある。患者が少ないとちょっといいことがある。

待合室を抜けた診察室のさらに奥に茶室がある。他に患者がいないと、茶室に呼ばれて、お菓子が出てきて、佐々山がお茶を点ててくれる。つまり緑茶じゃなくて、抹茶のお茶をいただくのだが、この場所を診察室からは処置室と呼び、茶室から診察室のことを「外の世界」と呼ぶ。冗談なのか本気なのかどちらでもいいのだけれど、なんだか滑稽で面白いのでそれに付き合っている。

神妙な顔つきでお点前をする佐々山とある話をする。朋子はここでしか話さなくなったことがある。

今さら、そのことで子どものようなことを言ったとして、どうなる訳ではないのだから、もうそのことは、外の世界では言わなくなった。ココロに閉まったまま開けない箱もある。パンドラの箱とか呼ぶのはすごく簡単なことだけれど、朋子の角ばったココロを理解されたくなくて、そんな容易い言葉はふさわしくないと思っている。これはそっとしておくのがいい。箱の存在はその内、存在のないものとなって、誰にも知られずに宇宙の塵となって消えてしまえば、それが一番いい。鍵をかけた訳でも壊したい訳でもない。

ただ、この茶室に呼ばれた時だけ、話したくなるのだった。しかも、佐々山の方から。

「朋子さんの..... 待ち人はどこから来たんでしたっけ？」

「たぶん、東京の方じゃないですか？」

「そうですか」

そうやって、茶人はその人のことを待ち人と呼び、私はそれをFと呼ぶ。Friend(s)のFだ。いつまでも友達でいたい。そんな気持ちを持ったまま、私は大人になった。

私はFの友人としての存在を認めているのだけれど、私以外の誰もがFのことを知らなかった。同じ学校にいた訳でも、一緒に遊んだ訳でもない。

けれど、私の中では痛いほど強く存在しているのに、他の誰もが彼がココロに存在しないなんてことがあるだろうか？ そのふたつは一緒に私のココロの中に存在していたのに。

私はそういったことがきっかけで、佐々山クリニックに通うようになった。

Fなしでは存在できなかった、私という存在が肯定されているのに、Fだけが否定され続ける異常に私は気が狂った。

周りには何か悪い夢でも見たんだろうとか、変な宗教に引っかけたんじゃないかとかいろいろなことを私に言ったけれど、そうじゃない。周りがおかしいんだ。あんなにいい奴だったFのことをよくもやすやすと忘れられるなあ。それが私の異常ではなくて、みんなの異常なんだと本気で思っていた。

でも、私以外の全体一致の意見によるとFは存在しないことになっている。最初はそれに抗っていたけれど、そうすることになんの意味もなく、私は私でFが居なくても、自分が正しく存在できるという事実もあり、正常に戻ったんだと思う。見せかけだけだけれども。

けれど、なぜか薬と通院は続いていることがちょっと不満だけれど、まあ、茶人がお茶を点ててくれることだし、それはそれで悪くはなかったので、月二回ほどの通院を私は約十年続けることになった。

茶室の中では静かにFのことを思い出せて、私には至福のひと時と言ったところだろうか。

ここではFに思いを馳せてもいいんだ。そういう安心感があった。

お菓子をいただいて、お茶をいただく。そうして、また外の世界へ戻っていく。私は佐々山の点てるお茶を佐々茶と呼んだ。

朋子は佐々山になぜここに茶室を作ったのか聞いたことがある。答えは「毎日普通に生活してただけでは気が付かないところにぽっかり空いた、他の居場所を見つけることができるからだよ」とのことだった。

Fが私に何かしてくれたかという、別にそういうほどのことではない。彼は私に優しい存在を与えてくれたということが特別だっただけで、なにか施してくれたとかそういう訳ではなかった。

Fは遠足だとか、修学旅行に現れては楽しい思い出とも呼べないような何か記憶の片鱗を残してくれた。ちょっとだけ姿を見せては、すっと消える。そんなことを繰り返して、彼にとって何の役に立ったかわからない。でもそうした存在感が私のココロには幼い頃から存在していた。

Fがいたからと言って、物質的に得することはなかったけれど、その優しいまなざしにその時々ずいぶんと救われた。私はFが好きだった。そのよくわからない存在に焦がれていたんだ。

朋子は佐々山の茶室を訪れるようになってから、まだ間もなかったのに、ココロに別の居場所があるとかそういうことは考えられずにいたけれど、高校をぎりぎりまで卒業して、一年の空白の後に大学に入学したのちに、茶道部に入ってみた。

なるほど、ココロにぽっかり空いた他の居場所とはこういうことなのかなとわかり出したころ、朋子はFと再会することができた。

大学の茶室に行くとFが時々朋子のことを待っていて、お茶を点ててくれた。誰も居ない茶室にFと二人きり。以前とちょっと様子が違うけれど至福のひと時だった。私の様子を見守っていてくれる。そんなFの存在感に私は安堵に満たされた。

大学を卒業すると私はすぐに近所の茶道教室に入ったのだけれども、どうも気が向かなかった。Fと会うことができなかったからだ。先生の家にある茶道教室ではいつも他の誰かがいてFとは会うことができないとわかった。茶道教室はなんとなく今も続けていたのはいつか誰も居ない時があって、Fと会えるかもしれないと思うからだ。

Fと会えなくなったことを佐々山に話した。佐々山はいつものようにガリガリとカルテに何か書き込んで言った。

「そっちで一服点ててあげようね。たぶん、あなたの『お友達』が現れることはないと思うけれど」

そう前置きして、佐々山は私に一服点ててくれた。

私は涙しながら、その一服をいただいた。とても美味しかった。うんうんとにこやかに笑う佐々山はいつも通り優しくかったけれど、今日はひと言多かった。

「あなたの『お友達』はあなたの中に存在している。それだけでいいじゃないですか？」

確かに私の中で存在している。それでもみんなに認めてもらいたかった、Fの存在を。Fの優しい存在感をみんなで共有したかったのに、それができないことなんだということが、この十数年の間でよくわかったことなのかもしれない。

でもそれじゃあ、私の生きている姿ってまた真っ暗な夜道に過ぎないんだと思うと、そのまま茶室の畳に埋もれて泣いた。

Fのことを待ち続けているとは言え、私にも恋人はいることはいた。わずか半年で別れたけれども。

特にその人のことが好きだったかどうかよくわからない。よくわからなかったものだから、それを相手に見透かされていたんだと今になって思う。別れの理由はよくわからなかったけれど、相手の方から好かれ、嫌われた。ただそれだけのことなのに、私はひどく動揺した。

その頃、Fのことを忘れようと必死だったから。一瞬楽しかったから。

ひとりの人間の人生という軸の中で、出会い別れる人はたくさんいる。なぜか恋人のことはあっさり忘れられたのに、Fのことだけ忘れられなかった。それを高校時代の友人に言ったら「残酷」と一言。私は愛してくれたであろう恋人のことを愛せず、そして忘れた。確かにそう言われても仕方ないことなのかもしれないと納得してしまう。

いつ、Fが私のところにやってきても大丈夫なように、心の準備は出来ていた。恋人も愛せないココロとは大違いだった。恋人を愛せないなら、恋人でもなかったのだろうと今になってみれば思うこともある。

ある友人からも言われた。「Fはあんたのココロが創り出したものじゃないの？」

何もココロに貧しいものはなかったはずである。求めるもの、求められるものを充分ではなかったけれど、私のココロは供給していたはずである。恋人を満たせなかったのは、単に私がFに恋していたからではないだろうか？

自問自答を続けても、何の役にも立たない。私は日々起きることを淡々とやり過ごし、これから一生を終えよう。そうすれば、いつかFがやってくるかもしれないから。自分の中からFを抹消することは一生できないかもしれないけれど、その努力はしよう。それでいて、いつでも会えるようにココロの準備はしておこう。

ある日、私は茶道教室の茶会の手伝いに呼ばれることになった。佐々山はきっこうというのは好きだろうからと、茶券をあげた。うれしそうに茶券を受け取ってくれた。

それは初夏の頃だった。

日本庭園で行われたその茶会は少し暑かった。

そこで私は紛れもなく、Fの姿を見た。Fは客人として、茶会に席入りしていた。私は声を掛けることはできない。Fの隣には佐々山が座っている。佐々山はFとは知り合いとかではなさそうで、ふたりとも知らぬ顔でお茶を飲んでいた。

Fがこちらを見ているような気がする。私と気が付いてのことだろうか？

そうでもないような、そんなような気がした。私は眩暈がして、水屋に引っ込んだ。

でもあの時、逃げなければよかった。玄関で待ち伏せて「久しぶりね」って、声を掛ければよかったんだ。

佐々山クリニックを訪れる日が来た。今日は茶会に来てくれたお礼を佐々山に言おう。そう決めてやってきた。クリニックは混雑していた。

「先生、先日はありがとうございました」

Fのことは言うのはやめておこう。ここは外の世界だから。

「いやいや。あー、あれねえ。よかったよ」

なんだか佐々山の様子が変わる。さてはFのことに気が付いたのだろうか？朋子は次の言葉を待った。

「あーあのお菓子の名前は…… なんて言うんだったっけ？」

「朝顔でした」

「あー、朝顔ね…… きれいなお菓子だったなあ」

「はい…… あのお、先生、なんか変ですよ？」

「僕の隣にいた、青年ねえ」

「私の『友達』です。例の」

佐々山は私と外の世界にいる限り、Fのことを否定し続けてきた。

だから、私は茶室にいない限り、Fのことを佐々山に話すことはもうしなかった。

「そうみたいねえ。君と『友達』だと言っていた。なんで会いに来なかったの？」

答えは簡単だ。「もし、否定されたら、私は二度と立ち直れなくなる」から。

「もし」に賭けて、自分のこれから先の穏やかな波を止めたくなかったから。

きっと私はFという人物の虚像を眺めていたから。実際のFが私の思い通りではないであろうことは今までの経緯から予想できていたことだったから。

単に、私は夢を壊したくなかったから。

それだけの理由を並べて、逃げるようにして帰った。

私はFを否定する人を否定し続けてきたけれど、Fの存在そのものも否定してしまうことになった。夢を壊したくなかったから。

それから先の日々はFを友人として認めないことからのスタートだった。

Fというのはその人のことを差す単なる代名詞で、Friend(s)でもなんでもないということから始まった。

もう佐々茶もいただかなくてもいいし、そもそも私は事実が明らかになって、まだなお薬を飲み続けなくてはならないのだろうかという疑問に立ち返り、薬を飲むのを止めてしまった。私以外の人間に認められてしまったFはもう私のためのFではないような気がした。

薬を止めたからって、なにか特別な異変が起きた訳でもなかった。最初は身体がなんだか重たく感じたけれど、すぐにそれにも慣れた。もう、元通り。佐々茶をいただきに行くこともなくなった。

なんで、十年以上もクリニックにかかり続けたんだらう。

私がFを肯定する限り、佐々山の診察を受けなくてはならなかったのだらう。佐々山がFを否定し続けたから。なんの証拠もない事実には振り回された訳だ。

別にFが居なくても、今の私の生活は成立しているし、特別な苦労はなかった。それにしたって、Fは私の前に姿をわざわざ現した、その意味が何なのかわからなかった。

佐々山のクリニックに行かなくなって、二カ月以上過ぎた頃、偶然、街中で佐々山に会った。無視して過ぎ去ろうとした私を佐々山が声を掛けてきた。

「最近、来ないね」

「もう、いいでしょ。私は嘘なんて付いてなかったことがはっきりでしょう？」

私は少し怒って言った。

「嘘をつくことなんて、人間にはよくあることさ。そもそも、君を僕のところに寄こした人が僕らに対して、嘘をついていたことだって、あり得たんだ。君が悪い病にとり付かれているものだと決め込んでいた訳じゃない。君の取り巻く環境が、君を嘘付き呼ばわりするのであれば、その重責から解放させてあげなくちゃならないからね」

「先生は！！」

歩道にいるたくさんの人が私たちが気にしながら、通り過ぎていくのがわかる。

「先生は…… 私を外の世界では嘘付き呼ばわりしたじゃないですか。そんなものはないと、言い続けたじゃないですか。それが今になって」

私は涙をぼろぼろとこぼしながら続けた。

「FもFですよ。私自身、あんな適当な行動を起こして惑わすような真似をして、迷惑ったら、ないです。それに先生まで」

「君のお友達はそれなりの事情があったんじゃないのかな？」

「そんな言い訳、聞いたってしょうがないんですよ！ 今さら、どうにもならないことだらけで、私は…… 私の十年以上の歳月が…… これまでFなしで頑張ってきたのに…… 意味のないものになってしまうじゃありませんか」

「そういうことばかりじゃあ、ないと思うんだ。君の未来はまだこれからも続く訳だし」しどろもどろになりながら、答える佐々山はどうしてこんな態度なのだろうかと私は不思議だった。

まるで佐々山はFとの間を継続させたいみたいじゃないか。

私がFとの関係を修復させたかったように。

それからの日々、私は常に苛立っていた。どうしても自分の思った通りにならないとかそういうことではなくて、全て、全てにおいて苛立っていた。自分が生きていることにも苛立っていたんだ。死のうとかは思わなかったけれど。

そんな訳だから、結局、佐々山クリニックではない別の心療内科クリニックを訪れて、少し薬でももらったら、ちょっとは気の済むようになるかとも思ったけれど、話の前後が分からない新しい別の医者のところを訪れるのも検討違いだと思い、結局、佐々山のところを訪れた。

佐々山は朋子が訪ねてくると「おっ」と言い、茶室の方ではなく、診察室で話をした。

「僕にも居たよ。友達というか…… 存在しない存在が。

医者になろうと志してから、勉強ばかりしていたら、友達が居なくなってしまってね。だったら、友達なんて自分の中で造ってしまえばいいと思ったのが発端だ。

僕は姉が二人も居て、女の人はどうも怖くてねえ。兄貴が欲しいと思っていたから、年上の兄貴の存在を造った。野球を教えてくれたり、一緒に悪戯をしたり、楽しかったなあ。こころの支えて言うか、僕のこころの中に具体的に存在した、兄貴だったと言えばいいかな。

でも、その存在も居なくなった。要らなくなったんだ。大人になるにつれてね。

朋子さんのFという存在は…… きっとそういう類なのかと…… 今でも、思わないではないよ。

僕がああ茶会で出会ったFという存在は君が造って、僕が見た。確かに周りの人間もその存在を確認したことだろう。けれど、ある意味、僕等と同じ人間じゃないかもしれない。君の増幅した思いが、存在をあ茶会に思い現わしたのかもしれないじゃないか」

Fはそんなに否定された存在でなければならないのか。では、私も先生も否定できる存在なのではないだろうか？ そう、問うた。

佐々山は「そうかもしれないね。そうだよ、きっと」と笑った。

そんなに人間とかこの空間に存在するものが、あやふやなら、科学なんて存在しないじゃないか。それを否定する概念がないだけで、存在はするやもしれないじゃないか。

朋子は激怒し、茶室の扉を開けた。

朋子を救ってくれた佐々山茶室には、まだ違う希望があるかもしれなかったから。朋子はそれに賭けたかったから。

茶室はなくなっていた。

佐々山の書庫になっていた。

佐々山は「そこに茶室なんてなかったよ」とまた笑った。

「そこには美味しいお菓子があって、先生の点てたお茶がいただけたじゃないですか」

朋子は涙を流して、自分の存在を確かめるために涙をぬぐった。

その涙がこぼれて、書庫のじゅうたんにしみを作った。しみの輪っかが、すぐに消える。その分、朋子の心にぼっかりとすき間がはじめて空いたということは、そこが茶室だったことを証明する。

<了>

空の証～くうのあかし～

<http://p.booklog.jp/book/46625>

著者 : parikasa

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/parikasa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46625>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46625>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.